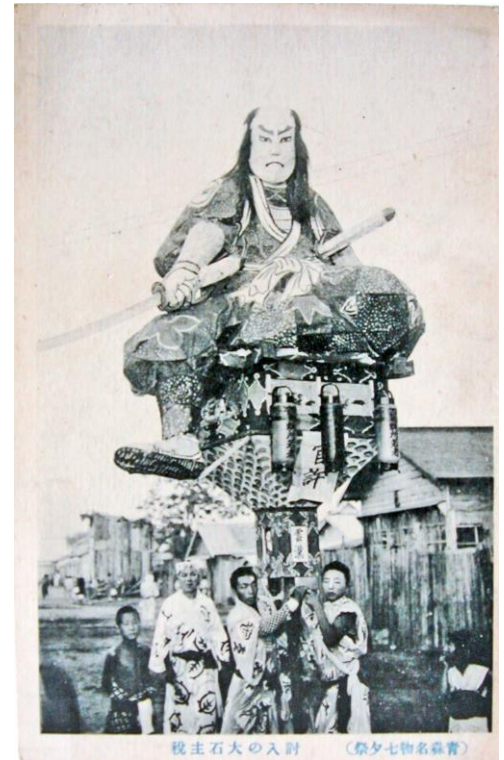


今年もねぶた祭りの季節が近づいてきましたね。ねぶたは藩政時代から続く青森の伝統行事ですが、長い歴史の中で、禁止された時や中止された時がありました。

昭和12年(1937)7月7日に盧溝橋事件^{ろこうきょう}が勃発し、日本国内は一気に戦時色が強まりました。青森市では、この年の9月6・7・8日に「市制施行40年並に開港30周年記念祭」も予定していましたが、この記念祭と、その前に行われるねぶた祭りも時節を考慮して中止となりました。



ねぶた「御所の五郎丸・曾我五郎時致」
(昭和11年、歴史資料室蔵)



ねぶた「討入の大石主税」
(昭和11年、歴史資料室蔵)

その後、戦局はますます悪化し、ねぶたは中止されたままでしたが、昭和19年だけは「決戦生活の明朗化と士気高揚」のために開催されました。期間は8月4～6日の3日間で、4・5日は午後4～11時の自由運行、6日は青森警察署前で審査、優秀なねぶたには賞金が出され、その後そろって市内を運行しました。物資のやりくりが厳しく作製を断念する団体もあったようですが、参加ねぶたは18組、赤襦袢^{じゅばん}や女装はご法度、簡素な花笠のみ許可、ご祝儀は禁止、空襲警報が発令されたら解除まで中止というものでした。『東奥日報』の取材にねぶた製作者の方が、現在ねぶたを知っているのは14、5歳以上なので、決戦的な美しいねぶたをつくってねぶた行事を意識づけたいと話しています。ねぶたを知らない戦争中の子どもたちに、この機会に「美しいねぶた」を見せてやりたいと願ったのですね。